

歴史・平和教育における「二次受傷」をどう考えるか

—立命館大学国際平和ミュージアムにおける平和教育の現状と可能性

村本 邦子

(立命館大学応用人間科学研究科教授)

芳賀 淳子

(立命館大学国際平和ミュージアム課長補佐)

1. はじめに

日本の平和教育は、敗戦後、平和主義を掲げる日本国憲法と、「平和的な国家及び社会の形成者」の育成を掲げる旧教育基本法を理念的支柱として発展し、1970年から1990年代前半にかけ昂揚期を迎えたが、1990年代半ばより低迷・混乱期を迎えることとなった。竹内（2011）によれば、これは、第一に、「自由主義史観研究会」（1995年発足）や「新しい歴史教科書をつくる会」（1996年発足）などによる加害に関する平和教育を否定する言説が登場したこと、第二に、冷戦終結後の日本を取り巻く国際関係の不安定化が続くことで、「平和を欲するなら、戦争に備えよ」という言葉が現実味を帯び、平和教育の説得力が動揺していること、第三に、80年代に高揚した平和教育研究運動が低迷し始めたことによる。

いわゆる歴史修正主義の立場による議論は、これまでの平和教育は戦争の悲惨さと残酷さばかりを教える「戦争教育」であり、「平和教育のパラダイム転換」が必要だというものである（高橋、1997）。この議論については批判すべき点も少なくないが、ここでは詳細に入らず、そこには考慮すべき側面があることだけを指摘しておく。折しも今夏（2013年8月）、『はだしのゲン』に「子どもにとって不適切な表現がある」といった理由で、松江市の小中学校の図書館で閲覧制限されていたことが報じられ、大きな波紋を呼んだ。広島市が広島平和記念資料館の「被爆再現人形」の撤去を決めたことに対して、市民の反対運動が盛り上がりもいる。幼児期における平和教育に取り組んできた瀧口（2011）は、これまでのあり方を振り返り、「幼児期に戦争の悲惨さを伝えることは、子どもに不安を与え、トラウマをつくることになるのではないか、という思いがある」（p.200）と述べ、発達段階を踏まえた平和教育を考えていく必要があるとしている。

村本は二十数年にわたり臨床心理士としてトラウマ

治療に従事すると同時に、村川治彦や笠井綾らとともに、アメリカのドラマセラピスト、アルマンド・ボルクスによって開発された“*Healing the Wounds of History*”（HWH:「歴史の傷を癒す」）を東アジアの文脈に応用した体験型平和教育プログラムの開発に取り組み、その成果を公表してきた（村本2010、2012a、2012b、2014）。その一環として、2012年4月、立命館大学国際平和ミュージアムにて国際シンポジウム「人間科学と平和教育」を開催し、学際的検討を行ったが、ミュージアムにおいても、その展示や教育によって子どもや若者たちがトラウマを受ける可能性があることをどうするか、課題となっていることが確認された。折しも、HWHをセラピーとしてだけでなく、教育としても展開し普及させていけたらと考え始めていたところだった。

トラウマティックな場面を間接的に見聞することでトラウマ反応が起こることを「二次受傷」と呼ぶ。これは衝撃を消化しきれず抱え込んでしまうために起きるものであり、フラッシュバックや悪夢、繰り返し考えてしまうこと、眠れない、落ち着かない、不安などの反応が考えられるが、逆に、感覚麻痺や否認といった心理的防衛メカニズムが働くこともある。その結果、そのテーマを避けるようになるのであれば、たしかに暴露型の平和教育が逆効果になることはある。HWHでは、歴史のトラウマを扱いながら「二次受傷」を防ぐための工夫がなされている。村川（2012）は、客観的事実の伝達に偏った歴史教育は、戦争体験が生きた感情抜きに伝えられ、戦後世代にとっては、戦争の記憶が自らの生と切り離されていく一方で、戦争による暴力が身体行為レベルで伝達されてきたと考えるが、筆者らが開発してきた体験型平和教育プログラムは、自らの生と結びつく形で歴史を学ぶことを目指し、衝撃的な事実と直面した時、それを感情的に消化するためのワークに十分な時間をかける。今後、国際平和ミュージアムと協働して、歴史・平和教育に携わる教師、

職員、ボランティアが、その教育実践にHWHの手法や考え方を取り入れることができるようにできたらと考えた。

そこで、歴史・平和教育における「二次受傷」の扱いや子どもたちの発達段階を考慮した歴史・平和教育のあり方を考えるための第一歩として、現状把握のための調査とHWHを応用した歴史・平和教育従事者向けプログラムを試行した。

2. 歴史・平和教育における現状 ～生徒と教師へのアンケート調査から

2006年度4月、立命館小学校が開学し、立命館学園では小学校から大学院まで平和教育における一貫教育の展開を可能とする組織体制が整い、国際平和ミュージアムは、単なる平和展示施設としてだけでなく、平和教育や平和研究の役割を担うことが期待されるようになった。そこから、大学教員らも一緒に、歴史・平和教育に関わる附属校の教師たちの立命館附属校平和教育研究会を組織し、年2回の研究会を開催して、各附属校の平和教育に関わる取り組みについて情報共有し、実践報告書を発行している。この研究会を通じて、歴史・平和教育における現状を探るため、生徒および教師たちへのアンケート調査を実施した^{*1}。

2-1 生徒調査から見てきた現状

生徒へのアンケート調査は、学園の一貫教育部を通じて、4つの附属中学校・高等学校の中で、生徒への事後アンケート実施の協力を呼び掛け、一つの附属中学校で実施することが決定し、124票を回収した（回収率93%）。対象となった中学3年生は、昨年2012年秋、京都研修旅行の一環として立命館国際平和ミュージアムを訪れている。直後のアンケート結果を参照すると、生徒たちの多くが、数々あった企画のなかでもモンテ・カセム館長の話と平和ミュージアム見学は有意義だったと回答しており、「時間が足りなかった」との記述もあった。アンケートには、ひとつだけだが「テーマが重すぎた」という理由で平和ミュージアム見学は時期尚早と回答しているものがあった。今回は丁度1年経過後2013年10月に、平和ミュージアムでの学びがどのように定着しているのかいないのかを問うてみた。

生徒たちは、事前学習として、学校で戦争や平和についての学習をしており、自主的に戦争や平和について調べ考えたり、戦争体験者の話を聞いたりしていた。

ミュージアムで印象に残っているものとして、映像や写真、わだつみ像や戦時中の家が挙げられていた。また、ミュージアムのスタッフが映像を見ながら説明してくれたり、戦争体験について語ってくれたりしたことが印象に残っているなどの声が12人から挙げられていた。

何を学んだかについてたくさんの記述があり、戦争について81もの記載が得られた。その内容は、戦争の悲惨さや無意味さ、戦時の社会の怖さ、憎しみの連鎖、日本がやられたこととやったこと、立命館の戦争関与の他、「目を背けたくるけど、戦争を知らないためだめだということ学んだ」、「戦争やテロの恐ろしさ、愚かさ、心の何かが少し変わった気がした」、「もう戦争をしてはいけない。立命館の意地が伝わってきた」など、学びを知的理解に留めるのではなく、自分自身の変化につなげるような能動的学習がなされていることも感じられた。平和についての記載は21あり、「平和の実現の大切さ」、「平和維持の難しさ」の他、「今の平和のありがたさ」、「平和、自分が戦争をしない国に生まれたのは奇跡だということ」などが挙げられていた。その他、「世界の格差や貧困」、「人と人とのありがたさ」、「命の尊さ、戦の愚かさ、自分たちが何をすべきか」、「授業では教えてくれないような細かく、難しいことも、そばにいたおじいさんが詳しく教えてくれた」などがあつた。研修後、誰かに話したかを問う項目では、ほぼ半分が母（85人）、父（39人）、家族と話していた。今取り組んでいることがあるかどうかを問う項目で、「はい」と答えたのは19名（15%）であり、取り組んだこととして、新聞を作ったり、戦争の記事や番組を意識的に見るようにしている、歴史や社会などの授業に意欲的に取り組んでいるなどが記載されていた。

最後に、ミュージアム見学を振り返って、「戦争を後世に伝えていける平和ミュージアムはなくてはならないものだと思う」、「とても良い経験をした。中2の時に良くて良かった。とても学びになった」、「ミュージアムでの学びはとてもありました。平和について、たくさん考えが生まれ、スタッフのみなさんも優しく丁寧にたくさんのことを教えて下さり、質問にも答えてくださり、とても良い時間を過ごせました。ありがとうございました」、「あの時、くわしく戦争のこと（資料）とかを見てなかったら今、戦争について特に何も感じずに過ごしていたと思う。世界の実情を知ることができて、視野が広がった。今の社会科の授業を積極的に取り組んでいる」、「『平和とは何か』ということ

を中学生のうちに知れて良かった」、「様々な歴史を形として見る事ができ、また『平和』という言葉を重ね受け止めることができた」、「もう少し日本軍がした戦争の数々を授業で学んでから行けばもっと色々なことを感じられたのではないかと思います」、「ミュージアムの見学時間が短かったが、この3年間の平和学習で一番印象深かった」、「平和ミュージアムの時間をもっと増やして欲しい」、「戦争についてミュージアムで詳しく知れたから、平和について考えることができると思った」など27の記述が得られ、時間経過があってもなおミュージアムでの学びが強く胸に残っていることを感じさせられるものであった。

ひとつだけ、「1年もたっていないのにほとんど覚えていなく、戦争のこともこんなふうに忘れられていくんだなと思いました」とのコメントがあり、継続することの重要性を感じた。学びが定着している15%の層をどのように厚くしていけるかが課題だろう。また、今回、生徒たちへのアンケートでは、回答が学びの再確認につながることを優先し、「二次受傷」があった場合には回答しない可能性が高いことから、直接「二次受傷」について問う項目は作らなかったこともあるが、二次受傷の影響を感じさせる回答は皆無であった。ただし、この結果から全くなかったとは言えないこと、直後アンケートで、「テーマが重すぎた」という理由で平和ミュージアム見学は必要なかったと回答した生徒が1名あったことから、今後も注意深く見ていく必要がある。生徒たちの自由記述を読みながら、あらためてミュージアムのスタッフ（職員や学生ミュージアムスタッフ、ボランティアガイド）が生徒たちの目線で丁寧に対応し、学びをサポートしていることが実感された。

2-2 教師調査から見てきた現状

教師へのアンケート調査は、学園の一貫教育部を通じて、各附属校のミュージアム専門委員と各ミュージアム専門委員がそれぞれ5人に協力を呼び掛け、全体で90名の回答者を得た。うち4名が小学校、41名が中学校、43名が高校、2名が中学・高校で教えていた。教員経験年齢は10～19年を中心に若手からベテランまでバランスよく拡がっており、担当科目も国語、英語、社会、数学、理科、保健体育など多様であった。

2-2-1 教師自身の体験から

これらの教師たちに、これまで自身が受けた歴史・平和教育でショックを受けたことがあるかどうかを問

うた項目に対して回答のあった89名のうち42名（47%）があったと答え、その具体的場面として、広島平和記念資料館（8名）、戦争関連の映像（8名）、『はだしのゲン』（8名）、戦場写真（5名）、長崎原爆資料館（3名）、人種差別・部落問題（4名）、沖縄での戦争跡や資料館（3名）を挙げていた。

具体的記述としては、「小6の長崎修学旅行での資料館の展示に衝撃を受け、眠れず友人たちと語り合った」、「高校2年生の時、沖縄に修学旅行（平和学習中心）へ行く前の事前学習の際、ガマの中で集団自殺（自決）をした人々の写真を見たときに、このような死に様を選んだ（選ばれた）ことにショックを受けました（哀しみ・恐怖・怒りなど様々な感情が出てきて気持ちを落ち着かせるのに時間がかかりました）」、『はだしのゲン』の「被爆のシーン、ゲンの家族が亡くなるシーンなど、強烈すぎて、画面を見続けることができなかった」、「中学の時、社会の時間、中国に対して行った日本軍の行為があまりにひどく、写真を見て、日本人であることが少し嫌になった」、「小学校低学年に地域の公民館のようなところで、戦争に関する映像を見た。まだ戦争が起こるんじゃないかと思い、飛行機やヘリコプターの音が怖かった」、「11～12歳（小学校高学年）の頃、原爆に関する映画を観て、生々しい（グロテスクな）シーンに気分が悪くなり、それ以来、中学生になるくらいまで、戦争を描いた映画等の作品を鑑賞するたびに、気分が悪くなるようになった」など多彩な記述が得られた。

これらの経験によって、このテーマを避けたことがあるかどうかを問う項目では、回答のあった78名のうち7名（9%）が「ある」、71名（91%）が「ない」と答えている。逆に、「学校教育ではショックではなく、関心を強くもつようになり、本やTV番組をよく見ていた」、「小学校のころから、戦争の被害者（傷痍軍人ら）の姿は日常にありました。また両親から戦争体験の話は日常に聞いていました。しかし、問題意識というより冷戦やヤマトなどの関心も高かった。戦争の悲惨さも聞いているが、あこがれのような感覚であった」と記述した者もあった。

2-2-2 教師としての経験から

次に歴史・平和教育に関する教師としての経験を問うた項目であるが、これまでやりにくさを感じたことのある者は89名のうち31名（35%）であった。得られた具体的記述のうち、「二次受傷」と関連するものとしては、「ベトナム戦争博物館に行き、気分を悪くし

た生徒がいた(中学)、「広島平和記念資料館をおぼけ屋敷のように避けた(中高)」、「沖縄ガマに入った際、一部生徒が混乱(中学)」、「つねに自分の言動や用意するものが衝撃的でないかと考え、想定外の反応がないか顔色をうかがいながら話したりしなければいけない(中学)」、「配慮のために、多くのことを勉強しなければいけない大変さがある(高校)」などが挙げられ、生徒たちのショック反応にどう対処すればよいのか、またどのような配慮が必要なのか悩む様子がうかがえた。

その他のやりにくさとして、「平和教育を社会科だけのものと思っている教員がいること(高校)」、「戦争から約70年経ち、戦争を知らない世代が増え、平和が当たり前であり、平和教育が必要なのかという意識の蔓延(高校)」、「平和教育そのものが政治的と言われることがあるので、保護者の目が気になる。自衛隊が保護者にいた時は、やりにくさを感じた(高校)」、「年々、生徒の反応が弱くなっている、ヒステリックなナショナリズムに染まっている生徒が少なくない(中学)」、「生徒の年齢への配慮(精神的にショックを与えすぎないようにしなくてはいけないので)、学年としての取り組みの際は、他の先生との意識共有・教材説明、ゲストスピーカーを呼ぶ際の時間割り調整(高校)」、「どのように生徒が解釈するのか全く想像がつかないため、自分自身が強い気持ちで臨まなければならないから(教材づくりにおいて)(高校)」、「平和学習の価値を職場で共有化できない(中学)」など、現代日本の学校教育における歴史・平和教育の基盤自体が揺らいでいるなかでそれを教えることに困難を抱えているようだった。

テーマに困難を抱えているという回答は79名中18名(23%)であり、具体的状況としては、①気分が悪くなる生徒がいる(「中学2年生の生徒で、かつて広島平和記念資料館を見学した後に、気分が悪くなった女子生徒がいた」、「中3のニュージーランド研修(全員参加)の博物館見学で戦争の階で気分を悪くする生徒がいた。高2のベトナム研修のように希望参加であれば良いが、全員参加となると把握・方法が難しいと感じた」、「高校の授業でTV番組を使用する際、見たくない人は目を伏せるように指示していても、音声を聞くだけでも気分を悪くする生徒がいた」)、②拒否する生徒がいる(「高校の見学旅行で広島平和記念資料館の見学をする際、幾度の経験の中で必ず「見たくない」の拒否する生徒がいた」、「原爆の被爆者の写真や当時の衝撃的な写真を避ける子がいる」など)、③そ

の他(「小学校で平和教育に力を入れた場合、「またか……」と反応がある」、「中学生や高校生で、ごく一部であるが、偏見の枠(誤った歴史認識)からなかなか出て来れない生徒がいる」など)が挙げられた。「確かに悲惨な場面にトラウマをおこす生徒はいるが何も感じないということこそおかしい。その場面について意見交換したり、相互に思いを出すことで、そこから自分の本当の気持ちや意見が生まれる」という意見もあった。

最後に、「二次受傷」について知っているかどうかを問うたが、85名中40名が初めて聞いたとし、28名が聞いたことがある、17名が知っていると答えている。悲惨な戦争の実態に直面してショックを受けるのは自然な反応であり、そのことがそのまま「二次受傷」というわけではない。むしろ、衝撃が大きすぎて何も感じられないという「感覚麻痺」の方が問題であることもある。いずれにしても、歴史・平和教育が生徒たちに与える衝撃をどのように扱ったらよいのか、現役教師たちも戸惑いを抱えている実情が見えてきた。

3. 歴史・平和教育従事者を対象としたHWHワークショップの試み

表現芸術的要素を平和教育施設の見学に組み入れることで、展示物が伝える戦争の問題に体験的な理解を深めながら、湧き上がる様々な感情を安心して受けとめ表現できるようなプログラム展開の可能性を探ることにした。その第一歩として、歴史・平和教育従事者が「二次受傷」について理解し、ミュージアムの展示と表現芸術療法の手法を組み合わせた体験型歴史平和教育プログラムを自ら経験しながら、ミュージアムをより安全で平和な学習の場にするための工夫をとともに考える機会とすることを目的に、2013年9月14日、立命館大学国際平和ミュージアムにて、「こころとからだで考える歴史：歴史教育従事者を対象とした体験型歴史・平和教育ワークショップ」を実施した。

午前の部は、9時半～12時半の3時間のワークショップで、表現アーツセラピスト/カリフォルニア統合学研究所博士課程の笠井綾をファシリテーターに国際平和ミュージアムの学生ミュージアムスタッフを中心に計11名が参加した。午後は、14時から18時まで4時間のワークショップで、アルマンド・ボルカスをファシリテーターに、立命館附属の小中高校で歴史・平和教育を担っている教師中心に計20名が参加した。以下、その概要と成果を紹介する。

3-1 学生スタッフ対象のワークショップ 「自分だけの平和の絵本をつくろう」

3-1-1 事前アンケート

参加者11名に事前アンケートを行ったが、自身が平和教育で経験してきたショック体験として、「3歳の時、平和教育で戦争（原爆か、東京空襲だったと思う）のアニメ映画をみた。お母さんと妹が死ぬシーンがでてきて、ショックでその後は見れなかった」、「小学校2年生の時に、初めて広島資料館に行き、今はない展示物などを含め実際に原爆の悲惨さを知った時」、「小学校2年生の時に、戦争のドキュメンタリーを見て、実際に焼けた人の写真を見た時」、「小学校3年生（9歳）の時広島に引越した。それまでは原爆を知らなかったの、平和記念資料館に行くのも、学校で毎年8月6日に行われる平和教育も、怖いので嫌いと感じていた。特に資料館のジオラマが怖くて、資料館に近づきたくなかった」、「12歳くらいに、広島の平和記念資料館に行き、ケロイドを負った人の人形や被爆して傷を負った人の写真を見た後、食欲が減退した」、「12歳くらいの頃に、原爆ドームへ行き、被爆者の様子を表した展示を見た時」、「小学生で平和学習の時に、戦争へ行った人は、人を殺したと習った時、祖父は戦争に行ったと聞いていたので、祖父も人を殺したのか……と思うと信じられない気持ちになった」との記述があった。

また、平和ボランティアをやっていてやりにくいと感ずることとして、「小中学生は、まだ若いのに解説をするときにショックを与えるようなことを話す時。また、地下でショックを受けてからは、2階にきて、これからの平和や戦争以外のことについて話をしてもあまり聞いてくれないこと」、「平和について関心がありなさそうな小中学生に対し、どのようにして平和に対する関心を抱かせるか」などが挙げられた。自身がさまざまに大きなショックや拒否体験を経験しながらも、現在、平和教育に従事していることを考え合わせると、それぞれのプロセスがあったであろうことが推測された。

3-1-2 ワークショップ概要

笠井綾は表現アートセラピストであり、カリフォルニアの病院での緩和ケアや保育園でのファミリーセラピーなどをこなしている。広島出身で、表現アーツセラピーやソマティックの手法を使った戦争体験・被爆体験の継承や平和・和解ワークにも取り組んでいる。

ワークショップでは、初めに、自分がこれまで受けて来た平和教育、興味を持つようになったきっかけ、関わる事の難しさ、また持続的な興味を持つために何が助けとなってきたのかなどについて、小グループで語りあい、全体で紹介しあった。平和ミュージアムで働いているスタッフやボランティアが、それぞれ異なる平和教育の個人史を持ち、戦争や平和のテーマになんらかの思いを持っているとすれば、それらについて語り合い、自分自身のことを思い出したり、他の人の話を聴いたりすることで、子ども達への伝え方を考える上でのヒントになるのではないかと考えられた。

ワークショップのテーマは、「自分だけの平和の絵本をつくろう」というものであったが、絵本作りに向けて、まず体を動かしたり、声を出したりするウォームアップのエクササイズを行った。次に、ペアになって、「風がそよそよ」、「イライラ」、「雨がパラパラ」、「怒り」など、言葉に反応して動く、それをもう一人が鏡のように真似するというエクササイズを、感情や自然のイメージを織り交ぜながら行なった。こうして想像力と創造性をほぐし、自由に体を動かす感覚を保ったまま、「タッチドロイング」という版画の手法で絵を描いた。手や指を紙の上で踊らせることで次々とイメージが生まれ、失敗を気にすることなく、何枚も好きなだけ描くことができる。これを20～30分、瞑想のように続け、できあがった絵を振り返りながら、絵にタイトルやフレーズをつけ、その中から気に入った絵を5つ選んで、それを好きな順番に組み替えて台紙に張り、一つの物語を作って、ペアやグループになって互いに読み聞かせするというものである。最後は、出来上がった絵本の中からお気に入りの名場面1ページを選んで紹介し合って時間切れとなったが、学生達はワークショップ後、互いにシェアリングをしていた。

3-1-3 終了後アンケート

終了後のアンケートでは、回答者9名（学部5名、院生1名、その他3名）のうち、8名が「今回のワークショップで新しい発見があった」とした。具体的には、①平和教育を知的レベルに留めるのではなく、身体的なアプローチを用いたり、表現することを通じて統合できるということ（「身体にアプローチして平和を考えることができると知りました。考えて頭のみで平和を語るだけでは視野が狭かったのだと分かりました」、「戦争について学ぶことは、過去の悲惨な歴史を知り、暗い気持ちになりがちですが、今回のワークショップで、絵や談話により学んだことを振り返る、表

現するという方法もあるのだと知り、これらの方法はつらい歴史や思わず避けたい戦争の現状について、感じるやりきれない思いや嫌悪感を解消するよい手段だと思った」、②学んだことを他者と共有することの重要性（「同じ目的を持って自主的に参加しているワークショップで、お互いに話をする中で、自分の感情(自分も気付いてなかった感情)に気付かされた」、「自分の戦争や平和に関する展示を観て感じたことを他者に伝えることで、二次受傷が和らぐことに気がついた」、「普段自分は二次受傷について大丈夫だと思っけていても、他の人と一緒に考えると、実は……！もしかして……？という気付きがありました。改めて自分の心と向き合う時間を持つことは大切だと思いました」、「自分が日頃感じていなかったこと、皆さんと話をする中での気付きがありました。自分と向き合うことの大切さを感じました」といった記述が得られた。

また、9名中8名が、「今回、学んだことが今後の活動に役立つと思う」と答え、「自分だけでは乗り越えられなかったことも、他の人と話すことでスッキリしたり、自分の感情に向き合えたりするので、分かち合うという方法は、色々な局面で役立てられるのかなと思った」、「自己のふりかえりが重要、他者とのふりかえり（シェア）も重要」、「同じ学生ミュージアムスタッフでも業務内容が違っていたり、業務以外でなかなか話す機会がないので、もっと交流して気持ちや体験をシェアすることが必要だと感じました。また、学生ミュージアムスタッフの中でもこのようなワークショップを定期的に行うことができたらいいなと思いました」、「平和について学ぶということは、かたくるしいことばかりではなく楽しみながら学ぶこともできるのだと伝えたいです」、「学生対応、指導の中で生かせると思います。とにかく、共有・共感することから始まるのではないかと思います。一緒に活動する人が互いに理解し、共有・共感できる環境整備に努めたい」などの声が挙げられた。

その他の感想として、「今回のワークショップは、今後のミュージアムの活動に生かせるよい経験となっただけではなく、私自身も、平和学習に対する苦手意識を克服するチャンスにもなったと思います」、「今日は本当に楽しく活動することができました。このような活動をあまり経験したことがなかったので、とても新鮮でした。平和教育と“いやし”はセットでうまくやっていけばいいのだなということを学びました」、「本当に身体を動かしながら頭を使うと視野が広がってよかったです。ありがとうございます」などが記述

された。

3-1 教師を対象としたHWHワークショップから

3-1-1 ワークショップ概要

アルマンド・ボルカスは、カリフォルニア統合学研究所教授、リビング・アーツ・センター所長としてドラマセラピーの教育と実践に携わっているが、アウシュビッツ生存者を両親に持つことから、ユダヤ人とドイツ人の間に横たわる歴史的トラウマを乗り越え和解へと至るためにこのHWHを開発し、ドイツ人とユダヤ人、イスラエル人とパレスチナ人、アルメニア大虐殺、人種差別などをテーマに国際的な活動を展開してきた。今回は、歴史・平和教育に関わる附属校の教員たちに、HWHの一部を体験してもらった。

ボルカス氏のワークショップは大きく3つのパートに分けて行われた。第1部はホロコースト・サバイバーを両親にもつボルカス氏の自己紹介から始まり、参加者一人一人にワークショップで何を期待しているか、歴史・平和教育においてどのような難しさを感じているかを表明してもらった。参加者からは、平和教育研修旅行で沖縄に行った際に生徒が洞窟の前で意識を失った例などが話され、平和教育における「二次受傷」の概念の重要性が認識された。

その後、ドラマセラピーの手法を使ったウォーミングアップが行われた。具体的には、①参加者が円になって、一人一人自分の名前を音と動きで表し、それを全員が真似する。②全員が一列になり、一人一人が部屋の端から端に移動する間に自由に場面を想像し表現する。③全員が二重の円を作り、指示された様々な場面での簡単な役割を演じるなどで、これらによって参加者が楽しみながら心を開き、第2部、第3部の身体表現を自由に行えるよう準備を整えていった。

第2部では、4～5人のグループに分かれ、地下の平和ミュージアムの展示場に行き、展示物で印象に残ったものを身体を使ってグループで表現する「液体彫刻」と呼ばれる手法を用いたワークを行った。印象深かったのは、4つのグループのうち2つが、学徒動員で戦死した若者を神格化した写真を教室で学生たちがじっと見つめる姿を撮った写真のイメージを演じたことであった。平和教育を行う教員として、生徒を戦場に送った教員のあり方を切実に考える姿勢が表現されているように感じられた。展示物に接した時の印象を言語や絵画で表現するだけでなく、このワークのよう

に写真や展示物に「なってみる」ことで、見学者が展示物の多様なメッセージを自らの置かれている状況と結びつけながら掘り下げ、ミュージアムの展示が触発するメッセージが深まっていくことが感じられた。

第3部では、参加者が歴史・平和教育において直面している具体的な場面を簡単なドラマとして再現するソシオドラマのワークを行った。部屋の中央に椅子を二つ並べ、参加者からボランティアを募って教師役を演じてもらい、教師役の人に同僚や保護者、生徒などから発せられている様々なメッセージを投げかけてもらった。次に参加者の一人が生徒の役割を演じ、生徒から発せられる難しいメッセージを言ってもらい、それに対する対応をボルカス氏が例示してみせた。たとえば、「原爆の場面は怖いよ、寝れなくなるよ。怖いよ怖いよ……」と取り乱している生徒に対し、その生徒の手を取って目を見ながら安心させる言葉をかける方法などである。

3-1-2 アンケートより

ワークショップ後に実施したアンケートによれば、回答してくれた12名全員が「ワークショップに参加したことで新たな学びがあった」としており、具体的な学びとして、①参加者同士の問題意識の共有ができたこと（「参加された先生方の問題意識や現在行っておられる実践を自己紹介の時に知れて、おもしろいと思ったり共感できたりしたこと」など）、②ドラマを使った学習の効果（「演じること、自分の思いだけではなく、その人の思いを想像して行うことは、他の分野でも大変有意義であると感じた」、「写真を演じる中で、その当時の人の気持ちを感じることができ、良い意味で自分と距離を置いて、冷静に当時の様子を見つめることができたと感じる」、「役を演じようとする中で、ショックな印象をいただくものにも、共感する部分や、今の自分のおかれた環境の違いをより意識することができた」、「人物を演じることで、相手の思いが理解でき、それが大きな意味での交流は平和の基礎ではないかと発見しました」、「歴史的な場面（写真）を演じることで、気持ちも分かるが、少し離れた立場で話ることができる」、「ドラマセラピーの劇的効果、セラピーとしてのドラマの効果も改めて感じました」、「ドラマを演じることで、多様な考えができて感じました。たとえば、1枚写真を見ると、主観的に捉えてしまうが、写真家や少女、物といった立場になって考えると、違った考えができたからです」など）が挙げられている。

また12名中10名が「ワークショップで学んだことは今後教育に役立つ」と考えている（2名は「わからない」）。「直接的には使えないものもありましたが、役割を演じたり、恐れを抱いた子どもへの接し方等勉強になりました。また、いろんな先生方の個性や発想、感じ方も参考になりました」、「二次受傷に対する対応という点では、この4時間ではつかみきれなかったが、演じるという手法にはヒントを感じた」、「すぐには難しいが、授業の中で取り入れていく可能性がある」、「事前に逃げ場を準備するなど、残酷な場面を見せるとか、ストレートに指導するだけでなく、心理的な準備が必要と思った」、「平和教育に限らず、精神的に課題を抱えた生徒等に対する1つの対応として参考になりました」、「トラウマを生じない教材の提示方法、授業でやっていけないこと、すべきことを参加者間で議論する」、「演じた人に語ったりすることで、自分の内面（戦争の記憶・祖父母からの話）などがよびおこされ、自分の平和、戦争に対する思考の原点に気付くことができる」、「心理的効果と教育の関係は、1つの空白域です。ここを丁寧に考えていきたいと思います」などの声が挙げられた。

今回のワークショップでは、平和教育において教育者が直面する課題に対して、体験的なアプローチがどのように役立つかを参加者に実感してもらうことに重きを置いた。通常は4日から1週間かけて行う内容を4時間という短い時間の中で紹介するという制限の中で、その意義を完全に伝え切ることができなかったかもしれないが、これまでの平和教育の中で見落とされがちだった感情的、心理的なケアについての必要性は理解してもらえたようである。

4. ミュージアムにおける歴史・平和教育プログラムへの示唆と可能性

立命館大学国際平和ミュージアムを中心にした歴史・平和教育についての調査と教育従事者への試行的プログラムを通じて明らかになったことは、①教師たちの経験から、これまでの歴史・平和教育において「二次受傷」が想定される事例のあることが示唆された。②「二次受傷」が想定される事例は少数であり、大半の生徒たちはミュージアムでの歴史・平和教育を肯定的体験として捉えていた。③歴史・平和教育従事者たちの中には、「二次受傷」への対処について不安や悩みを抱えている者が少なからずいた。④体験的心理学の知見を接合することで歴史・平和教育を改善させる

可能性がある。⑤歴史・平和教育従事者たちのメンタルヘルスについても考慮する必要があるという5点にまとめられる。

アンケートやワークショップで語られたことから、教師たちはこれまで、悲惨な写真や場面などに気分が悪くなったり、混乱を示したり、極端な場合には意識を失うような生徒の事例を経験していることがわかった。これらは広い意味で「二次受傷」と言えるし、怖がって拒否する、ふざけて真面目に取り組まないというような態度も、「二次受傷」に対する防衛反応と捉えられるかもしれない。今回の調査では出てこなかったが、臨床の現場では、強いトラウマ反応のひとつとして「居眠り」という形をとった解離症状があり、戦争体験を聞くような場面で「不謹慎である」と怒られたという事例を聞くことがあるので、注意が必要である。このような事例は数として多いわけではなく、生徒たちからは歴史・平和教育が肯定的に受けとめられていたが、少数の存在が教師やスタッフたちを不安にさせる要因となっていた。

「二次受傷」を予防するためにどんなことに気をつけるべきかであるか、実のところ、子どもの発達段階を考慮した歴史・平和教育に関する研究はほとんどない。子どもの年齢より個別性が大きいためではないかと考えられるが、ひとつ参考になるものとして、戦後三世代によるナチスの歴史認識と現在の行動への影響に関する研究がある。これは、1989年から1992年にかけてドイツとイスラエルの研究チームが共同で実施した最初の調査であるが (Brendler, 1995)、ナチスの歴史のために、若者の70%が自分の国や自分の背景について愛着を感じるができず、肯定的国民アイデンティティを持つことができなかった。ホロコーストについて、65%が恥を感じ、41%が罪悪感を持っていた。50%は感情麻痺を表し、68%が脅威、罰の恐れ、未来への不安を持っていた。

また、ホロコーストの記憶と取り組むのに、4つの段階があることがわかった。①過去の影への攻撃的防衛、②拒否と当惑による合理化、③過去の罪と苦痛に関するあきらめの受容、④歴史から学ぶことで道徳的責任と自律性である。学校教育が重要であり、3段階目で起こりがちなトラウマを避けるためには、以下のような教育戦略が求められるという。①子どもたちにホロコーストの残酷さの証拠資料を見せる前に準備をさせ、後にも、起こったことの悲しみ等、理解するために十分な時間を取らなければならない。②教師はそのうえで、若者たちの感情的・実存的当惑を扱わな

ればならない。単に残虐な現実と直面させることは、脅しによる表面的な道徳化にすぎない。③子どもたちがホロコーストの話題に反発した場合、これを無視したり叱ったりしてはいけない。いわゆる「アウシュビッツの嘘」に固着させかねない。④14～15才の子どもにホロコーストを教えるというドイツ政府の決定には議論が必要である。アイデンティティ・トラウマの危険を考慮すべきである。

ドイツと日本の歴史・平和教育のあり方は大きく異なること、被害の歴史と加害の歴史をどこまで同じように扱えるかには検討が必要であるが、過去の記憶と取り組む4つの段階と示唆された教育戦略には、応用できるものがあると考えられる。たとえば、学生ミュージアムスタッフや教師より挙げられた対応に困難を覚える事例のなかには、①②③の段階にあると捉え直すことができるものがあるように思われるし、教育戦略の①②③はそのまま使えるものだろう。ワークショップ参加者たちは、ワークショップにおいて自分たち自身の体験を語り合ったり、アートや身体を使って感じたことを表現し共有したりすることで、学びがより実感を伴うものとなることを経験し、このような方法を自分たちも取り入れていけるのではないかと捉えていた。

最後に歴史・平和教育従事者たちのメンタルヘルスについてであるが、現在の学校現場で丁寧に時間をかけた歴史・平和教育を行うことが困難になってきており、歴史修正主義に代表されるような「戦争教育」批判に曝され、昨今、新たに浮上してきた「二次受傷」などに対する不安を抱えながら苦心していることが明らかになった。「二次受傷」を避ける歴史・平和教育を行うためには、事前に十分な準備を行い、感じたことを語り合ったり表現し合ったりする時間を取り、必要に応じて個別のケアが求められる。現場の理解を得られないために、慌ただしく歴史・平和教育が行われるならば、リスクも高く、学びの成果も見込めないという矛盾がある。

Zelizer (2008) は、平和構築に従事する人たちがトラウマと密接に関わる領域で仕事をしているにも関わらず、これまであまりそのことに眼が向けられてこなかったことを指摘し、「トラウマ・センシティブな平和構築アプローチ」を提唱している。困難な情緒的・心理的問題を扱うべきではないということではなく、参加者にトラウマを与えないような実践をするために必要最小限の知識を身につけておくこと、自分自身のメンタルヘルスに注意し、セルフケアができるように

なることが重要で、本来は教育課程で基礎的知識が得られること、心理学やメンタルヘルス関連の専門家と協働することが望ましいとしている。Zelizerが扱っているのは紛争解決に関わる平和構築であるが、歴史・平和教育に関しても同様のことが言えるだろう。心理学や心理主義はややもすれば国家主義の流れに与する危険性があるが（村本、2013）、今後、立命館における歴史・平和教育のさらなる充実を図るためうまく活かしていけたらと考える。

【参考文献】

- Brendler, A. K. (1995). Working through the Holocaust: Still a task for Germany's youth? In R. J. Kleber, C. R. Figley and B. P. R. Gersons (Eds.). *Beyond trauma: Cultural and societal dynamics* (pp.249-275). NY: Plenum Press.
- 村川治彦（2012）「一人称から歩み直す『戦争体験』～体験心理学に基づく歴史・平和教育の構築に向けて」『歴史のトラウマの世代間連鎖と和解修復の可能性～国際セミナー「南京を思い起こす2011」の記録』立命館大学人間科学研究共同対人援助モデル研究3、95-105頁
- 村本邦子編著（2010）『戦争によるトラウマの世代間連鎖と和解修復の可能性：国際セミナー「南京を思い起こす2009」の記録』立命館大学人間科学研究共同対人援助モデル研究19 (http://www.ritsumeihuman.com/hsrc/resource/19/open_research19.html)。
- 村本邦子編著（2012）『歴史のトラウマの世代間連鎖と和解修復の試み：国際セミナー「南京を思い起こす2011」の記録』立命館大学人間科学研究共同対人援助モデル研究3 (<http://www.ritsumeihuman.com/cpsic/model3.html>)
- 村本邦子編著（2012）『人間科学と平和教育～体験の心理学を基盤とした歴史・平和教育プログラム開発の視点から』立命館大学人間科学研究共同対人援助モデル研究5
- 村本邦子編著（2014）『日中の戦後世代を対象にした新たな東アジア型歴史・平和教育プログラム開発～国際セミナー「南京を思い起こす2013」の記録とHWH7年の成果』立命館大学人間科学研究（予定）
- 村本邦子（2014）「日本の児童・女性政策と心理学」心理科学34巻2号（印刷中）
- 高橋史朗（1997）『平和教育のパラダイム転換』明治図書
- 竹内久顕（2011）『平和教育を問い直す～次世代への批判的継承』法律文化社
- 瀧口眞央（2011）「幼児期の平和教育」竹内久顕編著『平和教育を問い直す～次世代への批判的継承』法律文化社、106-202頁。

Zelizer, C. (2008). Trauma-Sensitive Peace-Building: Lessons for Theory and Practice 81, AFRICA PEACE AND CONFLICT JOURNAL, Vol. 1 No.1 p.81-94

※1 アンケート用紙は下記のとおり。

生徒アンケート

2012年10月、中学2年生の京都研修では、立命館大学国際平和ミュージアムの見学とモンテ・カセ館長のお話を聞きました。今回ふり返りのアンケートを実施しますので、ご協力をお願い致します。（該当項目に○印、または、ご記入ください。）

1. ミュージアム見学の前に、どんな学習をしましたか？ 覚えていることを書いてください。
学校で
個別に（自主的に）
2. ミュージアム見学で、特に印象に残っているのは何ですか？
展示物・場所・その他（具体的に）
3. ミュージアム見学で、何を学びましたか？
4. 研修旅行から戻り、学んだことについてあなたはどのようにしましたか？
（複数選択可）
①家族と話しをした 【 父・母・祖父・祖母・兄弟・姉妹 その他（ ） 】
②友達と話しをした
③更に調べ学習をした
④何もしていない
⑤その他（具体的に）
5. 研修旅行で学んだことを通して、今取り組んでいることがありますか？ [はい ・ いいえ]
・取り組んでいることがあれば、具体的に教えてください。
6. 研修旅行をふり返って、今思うことを教えてください。

ご協力ありがとうございました

*本アンケートは、立命館大学研究推進プログラムの研究助成を受けて実施します。立命館大学国際平和ミュージアム

事前アンケート

ここからで考える歴史：体験型歴史平和教育ワークショップ

2013年9月14日開催する学生ミュージアムスタッフ学習会では、立命館大学応用人間科学研究科の協力を得て、「ここからで考える歴史：体験型歴史平和教育ワークショップ」を開催します。開催にあたり、ワークショップへの参加・不参加に関わらず、以下のアンケートにご協力をお願い致します。(該当項目に○印、または、ご記入ください)

- 所属 [学部生 ・ 大学院生]
- ミュージアムスタッフ経験年数 [1年 ・ 2年 ・ 3年 ・ 4年]
- 学部または専門 []


4. ご自身の受けた平和教育・歴史教育で、ショックを受けたことはありますか？
[はい ・ いいえ]
・何歳ぐらいに、どの様な場面で、どのようなショックを受けたのか、具体的にお聞かせください。

・ご自身がショックを受けたことで、そのテーマを避けるようになった経験はありますか？
[はい ・ いいえ]

5. ミュージアムに来館する小中学生に展示解説を行うにあたり、やりにくさを感じたことはありますか？ [はい ・ いいえ]
・もしある場合は、そのやりにくさについて具体的に教えてください。

6. 「二次受傷」という言葉を知っていますか？
[言葉の意味を知っている ・ 言葉は聞いた事がある ・ 初めて聞いた]

7. 9/14(土)開催のワークショップに参加しますか？ [はい ・ いいえ]

ご協力ありがとうございました  立命館大学国際平和ミュージアム

※本企画は、立命館大学研究推進プログラム(基盤整備)「平和教育施設を使った戦後第三世代の歴史教育に関する研究」の助成を受けて実施します。なお、企画のまとめとアンケート結果について、立命館平和研究—国際平和ミュージアム紀要等に投稿するなど、成果を紹介していく予定です。

事前アンケート

ここからで考える歴史：体験型歴史平和教育ワークショップ

第12回立命館附属校平和教育研究会(2013年9月14日開催)では、立命館大学応用人間科学研究科の協力を得て、「ここからで考える歴史：体験型歴史平和教育ワークショップ」を開催します。開催にあたり、ワークショップへの参加・不参加に関わらず、以下のアンケートにご協力をお願い致します。(該当項目に○印、または、ご記入ください)

- 所属 [小学校 ・ 中学校 ・ 高等学校]
- 教員経験年数 [1~4年 ・ 5~9年 ・ 10~19年 ・ 20~29年 ・ 30年以上]
- 担当学年、教科またはご専門 []

4. ご自身の受けた平和教育・歴史教育で、ショックを受けたことはありますか？
[はい ・ いいえ]
・何歳ぐらいに、どの様な場面で、どのようなショックを受けたのか、具体的にお聞かせください。


・ご自身がショックを受けたことで、そのテーマを避けるようになった経験はありますか？
[はい ・ いいえ]

5. 平和教育に関連する全ての学校活動(授業や学級活動も含む)において、やりにくさを感じたことはありますか？ [はい ・ いいえ]
・もしある場合は、そのやりにくさについて具体的に教えてください。

6. 平和教育に関連する全ての学校活動において、そうしたテーマを避けようとする子どもたちや、そうしたテーマの扱い方に困難を抱えている子どもたちはいますか？ [はい ・ いいえ]
・いるという場合は、子どもたちの年齢や状況についてわかる範囲でご記入ください。

7. 「二次受傷」という言葉を知っていますか？
[言葉の意味を知っている ・ 言葉は聞いた事がある ・ 初めて聞いた]

8. 第12回立命館附属校平和教育研究会9/14(土)開催のワークショップに参加しますか？
[はい ・ いいえ]

ご協力ありがとうございました  立命館大学国際平和ミュージアム

※本企画は、立命館大学研究推進プログラム(基盤整備)「平和教育施設を使った戦後第三世代の歴史教育に関する研究」の助成を受けて実施します。なお、企画のまとめとアンケート結果について、立命館平和研究—国際平和ミュージアム紀要等に投稿するなど、成果を紹介していく予定です。

事後アンケート

ここからで考える歴史：体験型歴史平和教育ワークショップ


2013年9月14日開催のワークショップにご参加いただきましてありがとうございます。以下のアンケートにご協力をお願い致します。(該当項目に○印、または、ご記入ください)

- 所属 [学部生 ・ 大学院生]
- ミュージアムスタッフ経験年数 [1年 ・ 2年 ・ 3年 ・ 4年]
- 学部または専門 []

4. 今回のワークショップに参加されて、新たな発見はありましたか？ [はい ・ いいえ]
・具体的に教えてください。

5. ワークショップで学んだことは、今後のミュージアムスタッフ活動に少しでも役に立つと思いますか？ [はい ・ いいえ]
・具体的に教えてください。

6. ご意見や感想をお聞かせください。

ご協力ありがとうございました  立命館大学国際平和ミュージアム

※本企画は、立命館大学研究推進プログラム(基盤整備)「平和教育施設を使った戦後第三世代の歴史教育に関する研究」の助成を受けて実施します。なお、企画のまとめとアンケート結果について、立命館平和研究—国際平和ミュージアム紀要等に投稿するなど、成果を紹介していく予定です。

事後アンケート

ここからで考える歴史：体験型歴史平和教育ワークショップ


第12回立命館附属校平和教育研究会(2013年9月14日開催)企画ワークショップにご参加いただきましてありがとうございます。以下のアンケートにご協力をお願い致します。(該当項目に○印、または、ご記入ください)

- 所属 [小学校 ・ 中学校 ・ 高等学校]
- 教員経験年数 [1~4年 ・ 5~9年 ・ 10~19年 ・ 20~29年 ・ 30年以上]
- 担当学年、教科またはご専門 []

4. 今回のワークショップに参加されて、新たな発見はありましたか？
[はい ・ いいえ]
・具体的に教えてください。

5. ワークショップで学んだことは、今後の教育活動に少しでも役に立つと思いますか？
[はい ・ いいえ]
・具体的に教えてください。

6. ご意見や感想をお聞かせください。

ご協力ありがとうございました  立命館大学国際平和ミュージアム

※本企画は、立命館大学研究推進プログラム(基盤整備)「平和教育施設を使った戦後第三世代の歴史教育に関する研究」の助成を受けて実施します。なお、企画のまとめとアンケート結果について、立命館平和研究—国際平和ミュージアム紀要等に投稿するなど、成果を紹介していく予定です。